

## 2. 同地方の江戸期医事

1) 郡上地方における疱瘡の小史：江戸時代、郡上各地でも疱瘡の大流行が繰り返されたようで「疱瘡見舞帳」（八幡新町斎藤家）など種々の記録が残されている。「大前家文書」（『飛驒の疱瘡史』）からは郡上八幡の町医富岡玄三が1850年8月頃南飛驒地方で種痘を行っていたという史実がうかがえ、郡上地方でもこれ以前に種痘の始まっていたことが推察される。『万留帳』（郡上牧村・粟飯原豊後正著）の1864年の記事には「当秋頃八幡並近に=疱瘡流行いたし候、然し近来植疱瘡はやり何れも過半ハ植有之候故か、大はやりニもなし」との記述が見られ、また、明治3年6月5日の領民へ種痘・施療事業の開始を知らせる郡上藩民政局御触書にも「尤当管内は是迄も少しハ被行有之言迄も之無く」と記述されており、明治3年4月の「府藩県種痘普及要請令」（太政官布告）を受けて郡上藩では種痘事業のための医学所を開設したが、その開始を待たず、すでに郡上での種痘はある程度普及していたようである。

2) 藩内の医事：郡上藩医は約14名を数え、身分的には士格医師と非士格医師、職制的には奥医師と表医師に大別され、また士格医師と非士格医師の間には同じ藩医であっても給与にはかなりの開きがある。なお、藩医の職務の一つ、軍役として会津救援のため派遣された郡上藩「凌霜隊」の軍

医小野三秋は、明治元年9月19日、若松城西出丸において隊員石井音次郎の右胸部弾丸摘出術を施行している。のちに郡上藩医学校の教官も務めた。

3) 領内の医事：①旅病人と町方医師 八幡八町の町組織には問屋という役があり、これは村送りされて来た旅病人を預かり、その詳細を町名主に報告し更なる次の措置について藩役所からの指示を仰ぐものであり、必要があれば町方医師による治療も加えられた（『名主役中心得書』南町名主斎藤家）。②「医師成願之事」 同『心得書』には城下での医師開業の手続きが記載されている。1828年の「片手配剤禁止令」、1860年の「素人による医療行為禁止令」などの御触書の存在は領内でも多くの不法医業が横行しその弊害が社会問題化していたことを物語っており、それ故に「医師成願」においてもより厳格な医師資格審査が必要とされたものと思われる。③「薬草見分御触書」藩役所より「山野に自生する植物を調査し薬草・薬種となるようなものがあれば、これを採取し製品化すること」が、1830年に郡内の町在医師に触出されている。

以上、郡上地方での自治体誌などの相次ぐ発刊により、以前には知られていなかった同地方での医療史の一端が明らかとなってきた。

（令和4年10月例会）

# 歴史的観点から理解する医学用語語源

杉田 克生

医学・医療を学ぶ上で医学用語の習得は避けては通れない。医学・医療には長年積み上げられてきた知識の体系があり、習得すべき内容は膨大で多岐にわたる。さらに科学技術の進歩は目ざましく、常に新しい概念に伴う用語が誕生している。学習者は多くの専門用語を学ぶ上で、それらを有機的に結びつけ使える知識とすることが重要であるが、各医学用語には複雑な内容と時代的背景が含まれる。作成された各時代の概念を反映する用

語の理解を深めるためには医学史の素養が必須である。

各語彙には複数の意味が時代とともに付加されてきたが、元となる語源がそれぞれありその変遷を知ることは人間の思考パターンを知る良い手がかりを与えてくれる。例えば医学用語としてメラノコリーとカタカナで表記すると音情報しか分からないが、語源はギリシア語“melancholia”で、「黒」の“melas”+「胆汁」の“cholē”すなわちヒポ

クラテス以来の4体液説のひとつである「黒胆汁」に至る。逆に当時の知識者の思考方法や文化を知ること、医学用語語源からその当時の医学概念を知る多くの情報を提供してくれる。語源を知ることが用語自体のもつ構造や性質に基づいて、体系的な習得にも役立つ。

学術用語としての医学用語は普通の日常語と区別するために特別な構成をしている。それは基本的に複合語の形を取り、欧米の言語ではギリシア語・ラテン語起源の言葉を組み合わせて特定の対象を限定的に表現し、その意味が曖昧で多義的にならぬようにする。例えば、脳の奥に隠れた部分を島“*insula* < L. *insula*, *an island*, *a detached house*, *apartment*”というのは、必ずしも「海中の孤島」ではなく、「個別の集合建築物」をすでにローマ時代に“*insula*”と呼んでいた。ガレノスなどの古代の医師は、臓器の名称に身近な事物の呼称を応用していたが、これもその一例である。

最初に“*thalami* (*thalamos*の複数形)”と名付けたのはガレノスである。“*thalamos* (視床)”はギリシア語では住居の「奥部屋」を表し、ふつうの訪問客の立ち入りを許さぬ「女部屋、寝室」を意味していた。これは視床が大腦の間の奥まった場所に位置し、特に視覚などの神経の中継中枢であることから“*thalamos opticus*”と命名されたことによる。その後視覚以外の神経機能を含むので“*opticus*”と言うことばを省かれた。ただし日本語では「視覚」を表す文字が「視床」に含まれているのは、このような歴史を反映している。一方、中脳は中脳水道より背側の「中脳蓋」“*mesencephalic tectum*”と腹側の「大脳脚 (広義) “*cerebral peduncle*”に分けられる。「中脳蓋」は上丘と下丘があるが、上丘は視覚入力を受けることが判明し、「視蓋」“*optic tectum*”とも称された。医学の新たな知見により医学用語に別称が加わる一例である。ちなみに日本では臨床上「中脳蓋」は「中脳視蓋」と称している。

欧米で用いられている医学用語のルーツはギリシア語、ラテン語であり、アルファベット文字を通常用いていない日本人には表意文字としての漢字に加えアルファベット文字を覚えねばならない。ギリシア語ではホメロスが叙事詩に「動詞を名詞化する *-sis* 名詞」を使用した。大量に使ったのはヒポクラテスとプラトンとされ、医学用語や哲学用語の概念を表すための用語に多く見られ、日本の明治以降新しい概念を表すために大量の漢字熟語が作られた。「専門用語は新しい概念を正確に言い表すことができるとともに、一旦作られると便利のため無造作に使われてしまう。専門用語に頼ることでもっともらしい“厳密な”議論もできるが、その結果借り物の思想が大手を振ってまかり通る。専門用語が増えると日常語から遊離するので、その結果成立した“厳密さ”など価値があるのか」と西洋古典学者の柳沼重剛氏は指摘しているが(語学者の散歩道 東京 岩波書店 2008)、常に心すべき言である。

一方、漢字を知る日本人にはいわゆる外来語のギリシア語・ラテン語由来医学用語を漢字で表す際の利点もある。日本の先人が“*neuron*”を「神経」なる漢字で訳出した。“*neuron*”は本来ギリシア語“*sinew* (*tendon*, *cord*, *bowstring*; *nerve*, *strength*, *vigor*)”からで、「紐状のもの」を広く意味する言葉であった。それが「弦楽器の糸」や「弓の弦」を表すのも、「動物の腱」から作られていたからである。それが特に「腱、神経」などを意味するようになったのは解剖用語として使われるようになってからのことだが、ガレノスの頃はそれらもまだ区別されておらず、単に「ひも」として書かれていた。それを翻訳する時にはその内容から「腱」あるいは「神経」と訳し分けてきた。

本発表では種々の医学用語を提示し、医学用語語源を理解するために医学史を学ぶ利点を提示した。

(令和4年11月例会)